

近代朝鮮における愛国唱歌教育運動と 開化唱歌の生成過程

朴 成 泰

Educational movement for patriotic school songs and the process of creating civilized songs in modern korea

Sungtai PARK

(Received September 27, 2002)

はじめに

朝鮮における近代は、¹⁾ 鎖国政治を貫徹していた朝鮮末期に日本海軍の戦艦雲揚号による江華島事件（1876年2月27日）が強制開国の基点となったことに始まる。しかし、朝鮮王朝538年間の政治理念であり、伝統宗教である朱子学儒教は統治理念であると共に、民衆の生活規範として深く浸透していた。このような朝鮮情勢は、開国直後の激変は避けられないものの、欧米の近代文明を少しずつ導入し、朝鮮の伝統文化と欧米文明が摩擦と共存を顕現する時期でもあった。

このような時代の背景を見据えながら、韓国近代音楽教育の起源を探るとすれば、鎖国時代に密教として伝道したカトリックの布教活動にその兆候を求められるだろう。とりわけ音楽教育は開国直後に入国した欧米のキリスト宣教師らが布教事業として、賛美歌を中心に洋楽を普及したが、結果として音楽教育の営みが存在したと考えられる。

前述した音楽教育がキリスト教という宗教儀式や信仰活動の領域を乗り越え、文明開化、自主独立、抗日思想、民族精神を含む音楽教育活動に顕示されたことは、日清戦争後から見え始めたと言える。

当時の朝鮮政治や北東アジア情勢をみると、開国・日清戦争という歴史的変革は結果として清国の支配を免れたが、朝鮮に対する新たな支配権をもつ戦勝国日本と、不凍港確保とアジア制覇を野望するヨーロッパの巨人ロシアが朝鮮支配を狙う緊迫した国際情勢を生み出した。

従来、朝鮮の近代史、近代教育史、そして近代音楽教育史関係の研究では、日清戦争前後から日露戦争直前までを歴史区分として「開化期」と称するものが多い。その叙述内容においても文明開化、自主独立、富国強兵などを謳え、希望、歓喜、光明に溢れる明るい時代を描写している。²⁾

しかし、当時の国際情勢からみると、朝鮮は中国の属国から離されたとはいえ、日本やロシア

の支配は避けられない国家存亡が問われる時期であった。開化唱歌においても、歓喜に溢れる明るい歌詞だけではなく、列強侵略、民族覚醒などの警鐘を鳴らすものが少なくない。

したがって、本稿では、開国から日清戦争までを中心に、当時の政治情勢や民族運動、それらを背景とする音楽教育活動を総体的に分析すると共に、愛国唱歌教育運動の母体となる開化唱歌の生成過程とその本質を考究したい。

1. 近代朝鮮における開化への道程

朝鮮は開国されたとはいえ、国際社会には1890年代から知られ始めた。しかし、朝鮮政府は江華島事件を仕掛けた日本をはじめ、欧米を侵略者として断定して警戒を呼び掛けた。同時に、民族指導者の徐載弼³⁾は、最初のハングル新聞『独立新聞』を刊行し、民衆啓蒙、文明開化、自主独立を訴えた。

彼は当時、日本の明治時代に国粹主義者の間によく唱えられた人種論、民族優越論、領土膨張論などを朝鮮に叫んでいる。

まず人種論を取り上げると、「人種の中では朝鮮人が東洋一である。清国人は鈍くて汚いし、頑なに良いものをみても学ばない。日本人は文明を模範することを好むが、性格がせっかちで、大事が起こると間違ふ。しかし、朝鮮人はその中間に当たり、日本人の開化思想にも関心をみせており、清国人の穏やかな性格も備えている。したがって、よく教えれば、東洋では秀逸な人種になるだろう」⁴⁾と朝鮮人の可能性を示している。

また、彼は同誌の論説を通して「富国強兵に資する学問と精神を努めると、朝鮮人も英国人や米国人に勝る。朝鮮も清国を破り遼東と満州を支配し、賠償金8億円を貰える。願わくば、朝鮮人も大志を抱け、10年後には遼東半島を占めて、日本の対馬島も返還させる決心を願って欲しい」⁵⁾と論じている。彼の思想は朝鮮人の気質昂揚、開化思想の普及に止まらず、日本の展開する日清戦争、帝国主義を模倣する傾向が見られる国粹主義の色彩を帯びており、相互共存や平和主義の大義はあまり感じられない。

一方、著者未詳のフランス学者も同国で朝鮮事情に関する全3巻の著書を刊行している。その内容は、朝鮮人の思考能力と資質は、東洋では最も優れた民族であるが、知識や才能を高める教育が行われない上、新しい発見や発明の機会も与えられない。このような内実が国力を衰退させ、近隣の強国に支配される現実を有していると指摘した。この著書については、『独立新聞』も取り上げ「こんな偉いフランス学者も、朝鮮人の種子と気品を称賛している。わが国も立ち上がる時があると信じる」⁶⁾と報じている。

文明開化といえ、古い物を捨ててなるべく新しい物を追求する傾向が多い。その背景に古い物や物事を軽視、あるいは無視する意識が存在している。しかし、古い物を否定することは、自己文化や伝統精神に対する自信の喪失であり、文明開化のみを享受してもその真価を見分けることができない。このような意味から、『独立新聞』（1898年3月8日付）より、朝鮮の歴代偉人で

ある將軍李舜臣が15世紀に朝鮮を侵略した日本軍に大勝したこと⁷⁾、16世紀に首都を包囲した清国軍に囚われ、清国より最高待遇と思想轉換の要求に屈しない忠誠を高評したこと⁸⁾などを学ばせようとした試みは、歴史から今日の苦難を乗り越え、民族英雄から知恵と勇気を得られようとする姿がみられる。

一方、当時の朝鮮社会は文明開化を歓迎する者ばかりではなかった。とりわけ既得権をもつ貴族階層の両班社会は「斥洋斥日」を叫んで、1894年東学農民乱と日清戦争以前の両班社会への回帰を求めると共に、欧米と日本を激しく非難した。すなわち、両班社会は自己改革の意志をみせず、依存心と固陋な風俗に拘り、「開化というものは何かといえ、外国と内通し、わが国の体制を崩すもので、決していいことはない」⁹⁾と言い、開化には無縁で疑いと憂慮に満ちていた。

ところが、江華島事件と文明開化に関する歴史認識は「大朝鮮は礼儀之邦と標榜して三十年前に外国船が江華島に停泊すると、これを敵として見なし追い払った」¹⁰⁾ということで、当時の朝鮮政府が鎖国政治を貫徹すると共に、開国による文明開化にかなり消極的姿勢を堅持したと思われる。しかし、この軍事行動は強制開国という屈辱だけではなく、日本植民地化への出発点としてとらえれば、朝鮮政府の状況判断の未熟さが朝鮮近代史の方向を大きく変えたと言わざるをえない。

このような失錯の背景には朝鮮社会の現状も顕在したと思われる。英国人女流旅行家のイザベラ・バード (Isabella L. Bird) が朝鮮人の民度について「狭量、マンネリズム、慢心、尊大、手仕事を蔑視する誤ったプライド、寛容な公共心や社会的信頼を破壊する自己中心の個人主義、二〇〇〇年前からの習慣と伝統に隷属した思考と行動、視野の狭い知識、浅薄な倫理観、女性蔑視といったものは朝鮮の教育制度の産物に思われる」¹¹⁾と指摘したように、民衆意識や生活スタイルが固有伝統といえ、それなりの価値も認められるが、時代の変化には対応ができなかった部分も存在した。

幸いに、『独立新聞』を中心に、文明開化への啓蒙運動が展開され、「朝鮮人も人間なら、自主独立を喜んで受け入れるべきである。官民が協力して富強国家をめざし、全てを文明国家から範として、それら文明国家と対等になることが愛国愛民である」¹²⁾と民衆に開明進歩を呼び掛けている。また、日清戦争では、開戦以来、朝鮮も日本と連合軍として清国と対戦した結果、朝鮮は自主独立国になったが、これは朝鮮軍が戦果をあげた結果であり、民衆も感激していたと報じている。¹³⁾ このような経緯も含め、1897年に首都漢城に独立門定礎式が行われ、内外に朝鮮も独立国家であることを公表した。

しかし、先覚者は、日清戦争を日本による朝鮮支配を目的とした戦役であり、朝鮮独立とは全く無関係の侵略戦争であると認識していた。その内幕は「悲しい、大韓人は他人に頼ったり世話になるな。清国に頼るな、召使や給仕に過ぎない。日本に頼るな、後日には内臓を盗られる。露国に頼るな、結局、体躯まで食われる。英国と米国に頼るな。清国、日本、露国に仇敵を作らるう」¹⁴⁾と分析し、朝鮮は欧米の帝国主義に紛れもない標的になっていることに警鐘を鳴らして

いる。このような動向は、当時の外交政策にも反映され、政府には欧米官僚の内政干渉を牽制する行動がみられ、それに対して報道機関は自主外交への努力として賛辞をいとわなかった。¹⁵⁾

朝鮮政府が開化を目的に最初に視察した外国は日本である。1876年金綺秀による修信使75名をはじめ、1880年に金弘集を代表とする58名が軍事、教育、産業などを視察し、日本の文明開化の実態を目撃した。日本は実学を重視すると共に、欧米の科学技術を受け入れ、来日する欧米人からも新しい技術や学問を受け入れていた。¹⁶⁾ また、兪吉濬は1881年、紳士遊覧団として日本を訪問し、その後、報告書に当る『西遊見聞』(1889年)を記して政府関係者のみならず、民衆に開化を促した。

一方、駐韓日本公使の大鳥圭介は、朝鮮政府に深く介入し、複雑多岐にわたる悪弊に取り組み、是正した。しかし、このような介入は日本が朝鮮の政治体制を日本に同化させるものとして、¹⁷⁾ 朝鮮の開化が日本に従卒される過程でもあった。

当時の開化は政治制度、科学技術、産業殖産などを重視した文明としての開化であり、思想としての開化ではない。それでも民衆の間では、思想の近代化も進められ、済物浦在住の郭逸が「開化というものは民衆に権利があり、官吏の違法行為には民衆が異議を申し立てられる。朝鮮では官吏が民衆を弾圧しても、民衆は逆らうことができない。これを正すためには、民衆に民権が与えられるべきである」¹⁸⁾ と民衆の権利を訴えたことは、当時の厳しい封建社会においては画期的な民権思想の芽生えであり、新たな開化の姿を見せている。

その後、開化運動が広がり、民衆の生活や意識に変化が現れると、朝鮮政府は「大体、開明、化成というものを開化という。開化を旨くすると神様の理が通じ、人間精神がよくなるにつれ、万物の性質へ同化する。大勢の人々が開化という名前だけを覚えるだけで開化の実態を知らない。その故に、開化を特別な事柄として認識し、常に紛乱を犯したり、倫理を破る。このような事態を開化ということはできない。危険な開化の影響を受けて紀綱と風俗が日に日に乱れ、世の中が狂っている。開化の実像を悟られないことが愛惜であり、開化というものは聖人の仕事である。これから、もし目の下の者が目の上の者に逆らったり、賤民が貴族に無礼をしたり、若者が年寄りや老人を舐めたりすることがあれば、礼儀を惑わして道徳を逆らう逆徒である。したがって、重犯は死刑に処し、初犯は流刑に処する」¹⁹⁾ と開化を目指す者は決して許さないの注意を法部(法務省)から告示した。これは、朝鮮時代の政治理念であり、朱子学儒教の中核思想として信奉された衛正斥邪²⁰⁾ を適用した儒教そのものを貫く姿勢である。

こうして開化運動は試行錯誤を繰り返し、日本を模範とする文明開化を受け入れようとしたが、新しいものを拒否する衛正斥邪思想が問題となった。後に、開化思想をもつ官吏が法律を制定し、西洋文明に疑いを持たないよう啓蒙したが、よほど普及ができず、むしろ開化への推進に難しい局面を与えていた。²¹⁾

しかし、30年前から始めた日本の開化過程をみても、外国人教師と顧問官など数百名が雇われ、様々な事業を始めると同時に、ひとつひとつ教わったが、決してすべてが順調ではなかった。しか

し、日本人はあらゆるものを真剣に学ぼうという姿勢をみせ、日本政府も積極的に関与して開化を成し遂げた事実がある。

このような日本の開化軌跡が『独立新聞』の「論説」に詳しく報じられたことをみても、²²⁾ 開化という時代の怒涛を朝鮮政府の法部が止めようとしても、開化という新たな思想と行動は民衆の生活、社会、そして意識に予想以上の早さで広まり、新しい時代の到来を予告していたのである。

2. 朝鮮開化における日本の対朝教育政策

朝鮮南部地域の全羅道地方官吏の悪政と収奪に耐えられなくて蜂起した東学農民乱の鎮圧が朝鮮政府だけではできなくなると、朝鮮政府は宗主国清国に出兵を要請した。しかし、日本は大陸支配を目的に在朝日本人居留民の保護を名目で出兵した結果、1894年7月25日、日清戦争が勃発した。

日清戦争で勝利を取めた日本は、朝鮮政府の政治、外交、軍事、経済、教育などに関する内政干渉を強め、日本の勢力を拡張した。当時、日本の代表的な教育雑誌『教育時論』は社説を通して、朝鮮教育制度改造の講究を促している。すなわち、朝鮮は開国後、西洋文化を偏愛してキリスト教の聖書が修身教科書として用いると同時に、儒教思想を以て子弟を薫陶したが、今は国粹主義を志向している。日本は、すでに近代教育を充分に経験したから、朝鮮のために適当な教育制度を立てられる屈強の参考になれると表明した。²³⁾ また、米国宣教師などの布教事業と教育事業、そして民族教育は警戒する必要があると指摘すると共に、日本の教育制度の移入を試みようとした。

このような施策は、日本の開化とその教育を移入することが目的であり、日本は「朝鮮国王殿下をして、日本に漫遊せきむる事」²⁴⁾ をはじめ、最高実力者である国王父親の大院君や法務協弁(次官)の李揆鎔(大院君の孫)も「一たび日本に漫遊せしめ、日本文明の真相を目撃せしむるを、彼国を感化するに於て、最とも必要也」²⁵⁾ と要人の政治的利用もためらわず、日本の開化を朝鮮に注入させようとした。

朝鮮の開化と教育のあり方は朝鮮、日本、そして米国が政治的色彩を帯びながら、微妙に絡み合う間に、民衆啓蒙に欠かせない教育制度に関する構想が描かれた。

駐朝日本公使の大鳥圭介は政治活動が活発な外交官であり、1893年に朝鮮駐屯日本軍を動員して国王高宗に圧力をかけ、国王父親である大院君を摂政に任じ、内政改革を断行した人物である。大鳥は親日内閣を成立させ、これを契機に日清戦争の勃発に関与した部分は極めて大きい。

大鳥公使の発言は朝鮮政府に影響力が大きかったため、日清戦争後の国政改革に発言力が強かった。大鳥の1894年に提出した「弊政改革案」においても、対韓教育政策の大綱が示されている。

同改革案では、第五条の「一般の学政すべき事」に学校制度論を触れ、「一、一般の学政は時宜を参酌して改正し各地方に小学校を分設し童幼を教養すべし 一、小学の設け漸次緒に就かば

進んで中学大学を設く 一、生徒中の優秀なる者を撰抜して外国に分遣留学せしむべし²⁶⁾ と提案し、朝鮮の教育制度は初等教育をはじめ、大学や海外留学も語られ、日本の学校制度にも準ずる学校系統を見せた。

当時、戦勝国日本では、朝鮮支配と植民地教育に対する議論に民間の論客も現れ、宮沢郡治は「朝鮮教育改良案」を示し「(1)朝鮮教育には、日本国語を用ふべし。(2)朝鮮中学の程度は、日本尋常中学に、朝鮮大学の程度は、日本高等中学の程度に準ずべし。(3)朝鮮中学は、師範学校と同処に設くべし。(4)初等学校の教員給料は、国庫より支弁すべし。(5)道徳は、東洋西洋の倫理を酌量して授くべし。(6)初等学校の読書は、初に日本の片仮名平仮名を教へ、次に漢字交り文を教ふべし。決して漢文を教ふべからず²⁷⁾」と示している。

この宮沢の「朝鮮教育改良案」は、先見をもつ注目すべき教育制度案である。日韓併合後、朝鮮総督府が第一次朝鮮教育令(1911年8月23日)を制定した内容をみると、初等教育の普通学校4年、中等教育の高等普通学校4年、女子高等普通学校3年、実業学校2~3年、高等教育の専門学校3~4年となり、いずれも当時日本の学校系統と比べると、おおよそ4年くらい短縮され、事実上、高等教育は存在しないものである。宮沢案がほぼ実現されたことは重要な意味をもつことであり、日韓併合後に設立された京城帝国大学に朝鮮人も入学が認められた。しかし、入試には、その4年を埋められる学力が求められ、朝鮮人の入学人数が少なくなったが、これは教育制度に起因するものである。

朝鮮は開国と開化という歴史的な大転換を迎えたが、その輝きには同じ位の翳りが共存する宿命を避けられなかった。それは、日清戦争後、朝鮮自身による自主独立、文明開化への努力の基に展開されたはずの近代教育の試みが日本をはじめ、欧米列強から早計、先行されて精彩を失う反面、戦勝国日本の対韓教育政策論が百家争鳴の時代を迎えていたことである。

日本植民地教育を支援する民間組織である東邦協会は、1894年7月28日、東京府の著名な教育家を招待し、朝鮮教育に対する意見を尋問した。この集まりは、初めての朝鮮教育の調査を決定し、日本の教育界からの朝鮮教育の調査は東邦協会に一任したが、²⁸⁾ 同会は長期に渡り植民地教育に関心をみせてきた。また、同年に常務委員長の辻新次の率いる「朝鮮国教育研究団体」に「委員は辻、伊沢、西村、野尻、日下部の諸氏なり」と報じられたが、²⁹⁾ 注目すべきは常務委員の伊沢修二が一員として加えられている。当時の伊沢は音楽教育にはほとんど関わりを持たず、政治活動や植民地教育に関心をみせていた。後に台湾総督府学務課長として赴任したが、その経緯は明らかにされていない。

対韓教育政策を主とする日本の論壇は、著名な論客である三宅雪嶺が地理、歴史の教育内容を語っている。彼は教育内容を東洋7割、西洋3割と割り振り、更に東洋は朝鮮2割半、日本2割半、中国および他アジアに中国2割、他アジア1割を割り振りした。加えて「且つ場合を見計らひて今回日本が支那を伐つ所以を説くは勿論³⁰⁾」と説く。

巖本善治によると「『朝鮮国現時の普通教育』は、『可成く、文学を少くし、実業を多くし、空

疎洪遠の智識を後にして、武的の鍛錬を多く』する『兵式実業的』を以て『大方針』とすべきであり³¹⁾と朝鮮の政治理念、学問である儒教を減らし、実業教育や軍事教育を重要な教育内容として策定している。

戦勝国日本は、朝鮮が敗戦国清国の漢文を学校教育に用いることに疑念を抱き、漢文による教材使用の不適理由を取り上げ、堤虎造は「(1)漢文を用ゐる間は、事大の念を去らざること」「事大の念の来るは、制度文物支那より来る」「(2)漢文は今世期の文明に伴隨せざること」「文明の事物を叙述するに足らず、開化の思想を修述するに適せず」「(3)漢文と韓語とは、語派の同一ならざること」「漢文は孤立語にして、韓語は漆着語なり」「性質相違すれば、学習に困難なる」「(4)漢文は殊に楷梯教育に適せざること。字画、音韻、意義の三者を記憶せざるを得ずして、学説の認る所を吻合せず³²⁾と漢文は時代遅れ言語であり、日本語やハングルとは文法も相違しており、ハングルは文明とは掛け離れた文字として文明社会を表せる文字ではないと示している。

反面、堤虎造は日本語に対して「(1)日本語は今世期の文明に適當なること、日本語は日本の文明社会に發達し、文明の事物を叙述し、開化の思想を修述するに適當なる」「(2)彼我の事情を疏通すること」「談話に、演説に、新聞紙に、雑誌に、著書に、彼我思想の交通頻繁にして、後文明の徳沢に浴し、我帝国の思義に感ずべし」「(3)日本語は韓語と其語派を同うすること。日本語は韓語と同く、漆着語にして、其性同きのみならず、其音韻も全く同一又は類似のもの甚だ多し³³⁾と日本語は、文明開化を述べられる言語として現代語ともいえるものであり、文法もハングルと同質の言語として定義すると共に、朝鮮教育政策において言語は漢文とハングルは駆逐し、日本語を採択することが最良と考えている。

このように、漢文を手厳しく批判し、日本語が文明社会によりふさわしいと述べた趣旨は、日清戦争の結果、いずれは朝鮮は日本が完全に支配するという確信を得て、日本語普及は現実問題として受け入れられたと思われる。

この問題は教育関係者だけではなく、ロシア国境に位置する鏡城に在住する実業家中井喜太郎の報告によれば、「日本語学を教ふる結果といふものは、唯今申す通り日本人に敵意を表させぬようにするのは下策であつて、中策は日本人に同情を表させる、上策になると日本人に好意を表させるやうにするのであります。概に一例を挙げて見れば、鏡城といふ所があるが、三分の二程鏡城の人民が露西亞語を話す、所が其結果只今鏡城の人民は朝鮮の都京城の安危如何は顧みず、浦塩斯徳の繁栄如何を顧みる、彼等の脳中には朝鮮あるを思はず、浦塩斯徳あるを知る [中略] そこで私が思ふに、朝鮮に於ては日本人の子弟を教育する必要にあると同時に、朝鮮人の子弟を教育するといふことが、日本の国力發展、民力休養といふ上に付て非常に必要であらうと思ふ³⁴⁾と現地体験から、どこでも民衆は母国語より、当地の言語に馴染まれる現象を見出すと同時に、朝鮮における日本語普及は単なる言語だけではなく、大和精神までも伝播できるとみている。

日清戦争後、日本は台湾など領土を拡張した上、朝鮮にも戦勝国として政府の主要分野を掌握

した。ところが、単一の大和民族を唱えてきた日本は異民族との国家統合が現実の課題となり、多民族国家を構想しなければならない局面に迫られた。日本は当時、多民族国家を「多民雑居国」という用語を使いながら、まさに「大日本帝国」なりの備えが必要になったのである。

教育界においても「多民雑居準備の教育」が議論され、『教育時論』も社説「時勢に対する教育問題」が掲載された。³⁵⁾ 要するに、「第一 徳育上に就きては」「我が国民と言語風俗人情歴史を異にせる」「異民族」「雑居するに当りては」「衝突を来す」「紛擾を」「なく、安寧」……「我が在来の道徳を毀損せざると共に、彼等が徳性をも満足せしむべき徳育の主義を論究す」「第二 智育上につきては、内外人の間に、智力上競争を呼越すは」「個人も私益」「国民の富力を増進する資力なかるべからず。之に対する教育上の準備は」「理科の教授に一層の重きを置き」「奨励する」「第三 体育拡張の必然、そこに於て乎見るべし」³⁶⁾ と論じた。

したがって、日本は日清戦争の結果、台湾、琉球などを獲得すると共に、朝鮮に支配権を争いながら、大陸の朝鮮にいかなる教育を行うかが問われた。朝鮮を目標にする欧米列強と新興日本との戦いが政治、外交、経済、軍事だけではなく、教育分野にも点火され、文明開化が学校を通して確実に伝えられた。近代への軌跡は支配と抵抗の構造を生み出し、近代教育と民族教育が台頭し、朝鮮では新たな教育史を創出していた。

3. 近代朝鮮における開化唱歌の生成過程

朝鮮において唱歌という音楽用語の起源の確かな実証資料は存在しない。音楽学者の魯棟銀氏によれば、「唱歌」という用語は「歌を歌う」という意味であるが、実際は「芸者が歌を歌う」ものであり、朱子学儒教を生活規範とする貴族階層の両班は下品な音文化として受け取り、重宝したことはないという。³⁷⁾ したがって、学校教育における芸術教育として「唱歌」が歌われるという光景、あるいは教科名称として「唱歌」を取り入れることは想像も付かないことであった。

最初のハンゲル新聞『独立新聞』(1896年)³⁸⁾ においては、民衆から歌ったり、創ったりした唱歌歌詞がしばしば掲載された。なぜ歌詞のみに取り扱われたかは、推測の域を越えられないが、当時は西洋楽譜が普及されなかったから、単なる朗読として表したり、一部から賛美歌旋律の替え歌で歌われたとみられる。『独立新聞』の唱歌歌詞の特色は、ほとんどの歌詞が8・8調で構成され、開化唱歌の基本構造を形成したと考えられる。その由来は明らかにされていないが、管見としては、8・8調の漢詩形式をハンゲルで表わし、それが民衆から反響を呼び起こしたと思われる。

民衆の音楽文化は口伝、新聞、そして教会を通して普及されたが、朝鮮王室が組織した軍楽隊や教会が用いる吹奏楽器、オルガンなどの演奏は、文明社会を象徴する音楽であり、民衆はそれを鑑賞活動による音楽行為に止まるしかなかった。しかし、歌唱は唱歌として呼び替えられても民衆の生活と精神がそのまま反映されて表れたり、伝えられるものである。それは開化思想と音楽芸術を直接に担う民衆による音楽教育活動の基盤を構築する重要な役割を成し遂げるものであ

る。

このような唱歌の普及は自主独立、文明開化、産業新興、男女平等などの希望と勇気を与える開化唱歌として現われる。その開化唱歌の事例をいくつか取り上げると、仁川済物浦のジョンキョンテク《愛国歌》では「祝おう祝おう わが国の太平を祝おう 嬉しい嬉しい自主独立 花を咲かせよう 花を咲かせよう 芳しい芳しい わが国芳しい 実れ実れ富国強兵 実れ実れ忠君愛国 頑張ろう頑張ろう 士農工商を進めよう」³⁹⁾と新しい時代の歓喜、希望、そして決意を表している。

京畿道の楊州在住の李ジョンウォンは《同心歌》を創り「目覚めよう目覚めよう 四千年が眠りこけ 万国が開かれ全てが一つ 区区細節切り捨て 上下同心同徳しよう 他国の富強を羨み理想なしに豊穡なし 虎をみて猫を描き 鶴をみて鶏を描く 文明開化するなら 実相が第一なり 池の魚を欲しがらず 網を張り捕ろう 網をすき捕ろう 網すき難しくない 同心を結びよう」⁴⁰⁾と民族覚醒と文明開化のため、民衆に団結を呼び掛けている。

さらに、学部（文部省に準ずる）主事の李ピルキュンは《大朝鮮自主独立歌》を創り「粉骨碎身して忠君しよう 忠君愛国忠君愛国しよう （合唱）わが政府を高く揚げ わが郷土も助けよう 眠りかけを目覚めさせ 富国強兵へ進めよう （合唱）他国に舐められて憤慨するばかり心を合わせてひとつ一つ改革しよう （合唱）士農工商に努めて 幸せを手に入れよう」⁴¹⁾と、自主独立、産業振興を訴えている。

愛国唱歌教育運動の母体として生成された開化唱歌は、開国直後から入国したキリスト教宣教師の布教活動に西洋音階による賛美歌が一部の信徒に教えられたことを鑑みれば、必ずしも開化唱歌が朗読だけではなく、賛美歌旋律による替歌としても歌われたと思われる。さらに、徐載弼をはじめ、著名な民族指導者である李商在、李承晩、尹致昊などが篤実なキリスト教信徒であり、⁴²⁾ 独立協会の結成メンバーであることを考えれば、⁴³⁾ 『独立新聞』に掲載された一連の開化唱歌の旋律は、彼らから影響を受けた信徒らが賛美歌旋律による替歌として開化唱歌を創った可能性が濃厚である。

開化唱歌は開国されて近代文明に恵まれる明るい時代として希望、歓喜、独立など躍動に溢れる歌詞が特徴であると同時に、学校や社会も近代を表象する学校行事や社会活動にも音楽活動として新たな姿を見せ始めた。

近代警察制度が始まり、警察学校に当る警務学校の生徒が《警務学徒歌》を創ったが、珍しい唱歌として「頑張ろう頑張ろう わが国警務頑張ろう 学徒は勉強して 国に尽くそう 民衆を守ろう 警務官になると わが任務は重大であり」⁴⁴⁾と歌われている。

独立門が建てられると、ヤンソン在住の金ソッカは《独立門歌》を創り、これは「わが朝鮮臣民は 独立歌を聴いてくれ 丙甲之寿設け 自主独立嬉しい 独立門を作り 独立歌を歌おう」⁴⁵⁾と日清戦争の結果、清国の属国から解放を喜ぶと共に、独立意志を決意するため建てられた独立門を称える唱歌である。

1898年9月18日、独立協会で国王誕生日「万寿聖節」の慶祝宴が開かれた。同会の会員および各学校生徒が独立館に集まり、生徒らは頭の上に美しい花を飾り、誇らかに着席した。会長の尹致昊が祝辞演説を終えると、生徒らは起立して《慶祝歌》を斉唱し、国王に捧げる万歳3回、皇太子に捧げる万歳3回、大韓帝国2千万同胞に千歳した。そして独立基礎のために億歳した後、喫茶したと報じている。⁴⁶⁾ 行事内容の報道をみる限り、民衆自身は国王、皇太子、民衆より、国家独立の優先が浮き彫りになっている。

このように、さまざまな開化唱歌が現れると、『独立新聞』は論説を通して「政府は学校の運動場に国旗を掲げ、毎朝学徒を国旗に向けさせて敬礼する必要がある。また、政府は国歌を制定し、学校では毎朝、日課前に斉唱しなければならない。国歌は学部から委員を任命し、ふさわしい歌詞を作る。学部は外国人に国歌の作曲を依頼し、その国歌は教員に教え、それぞれの学校で正しく教えることこそ、愛国教育と言えよう」⁴⁷⁾ と論じ、政府より早く言論界から愛国教育を呼び掛けた。このような提案は、愛国唱歌教育運動そのものにも影響を与えていたが、実際は国内に西洋音楽専門家の不足で期待した結果は得ることができなかった。

その後、日本海陸軍楽隊を20余年指導したドイツ人エッケルト (F.Eckert) が大韓帝国 (以下、韓国) 政府の招聘で1901年2月27日に渡韓した。軍楽隊は学部から所管し、ソウル塔洞公園に駐屯しながら、演奏能力を高めることができ、翌年10月25日には外部 (外務省) で演奏会を開くほどの進展がみられた。⁴⁸⁾

エッケルトは、韓国政府の要請を受け、国歌の作曲を依頼され、1902年8月15日《大韓帝国愛国歌》を提出した。それは「上帝はわが皇帝を救う 聖寿無疆して海屋等を 泰山のごとく築く 威権が凜流に馳せる 千万世の福祿が無窮する 上帝はわが皇帝を救う」⁴⁹⁾ と歌われた。しかし、この国歌は民衆から歌詞も旋律も馴染められず、次第に歌われなくなった。⁵⁰⁾

1897年8月17日、漢城の独立館で開国505年の紀元節が行われて国旗を高く掲げ、政府官僚、生徒、民衆が参列した。式次は、第1番目に、培材学堂の生徒らが《祝寿歌》を「五百余年の我が王室万歳、無窮に見守り……」と斉唱すると、外国人夫人も楽器で二重奏した。また、第4番目に、生徒らが国花《無窮花の歌》を「わが国わが国王は神様に見守れ 国王と百姓が一つになり万々歳 必ず幸せな独立国家を成し遂げよう」と歌うと、再び外国人夫人が楽器で応答した。式典最後の第7番目においても、生徒らが愛国唱歌を歌うと、外国人夫人が楽器でリズムに合わせて二重奏を行った。⁵¹⁾ このように、国家の重要行事にキリスト教主義学校の生徒、欧米人宣教師と推定される外国人夫人が音楽活動を展開したことは、儒教とキリスト教との対立する宗教問題があるとはいえ、開化唱歌が西洋音楽の体系に組み込まれる一面を見せている。

抗日運動団体において文化的抵抗として最大勢力である西友学会は、芸術教育に関する異例の生徒募集広告を出している。それは、教育書画館という教育機関であるが、西友学会の中心人物である朴殷植は、「写字、図画、写真、音楽」を教育するため、夏季休み限定の生徒募集を行った。受験は1907年7月19日に行われ、試験科目は写字・図画・読書が課され、受験年齢は10歳か

ら15歳までである。⁵²⁾ この広告の意味するものは、教育書画館が政治色彩を帯びる民族教育だけではなく、芸術教育にも関心を見せたことであり、注目すべきことである。

この時期になると、開化唱歌という時代を反映する文化、教育がある程度の形を作り、組織的、体系的、系統的に普及する傾向をみせた。とりわけ独立運動団体の機関紙には、学校教育や近代文明に関する啓蒙の記事や専門理論も掲載された。

当時としては、極めて珍しく東京高等師範学校留学生である張膺震が抗日救国団体の太極学会機関紙『太極学報』を通して、小学校各教科のあり方を論じている。唱歌科については、「唱歌は児童の発音・聴音の技能を発達させ、音楽の趣味を養育するとともに、高尚純潔たる心性を養うから徳性涵養を計る者である。大蓋、美感を養う必要と言え、美趣を感得して徳性涵養する音楽は図画より、一層優勝の価値を有している」と唱歌教育は音に関する感覚発達と徳性涵養に極めて重要な教科であると述べている。加えて、韓国の音楽教育においても、戦前からよく見られた「徳性涵養」という用語は、日本植民地時代に一方的に使われたものではなく、明治時代から張膺震が移入した音楽教育の理念であることが明らかになったと言える。⁵³⁾ しかし、張膺震は、日韓併合後、朝鮮総督府学務課の視学官として植民地教育の先頭に立ったことを考えれば、学問の奔流と時代の変革を感じさせる。

このように、暗黒の朝鮮時代に開国という歴史的転換は、新しい時代として文明開化を命題にする国家形成と教育改革を行わせた。それに同参した音楽教育もキリスト教から洋楽を受け入れることに対して、一早く開国した日本は洋楽を自主取捨したものが明治時代の唱歌を生み出した。日本はその後、大正デモクラシーの明るい唱歌、軍国主義の唱歌と軍歌の混合という歴史の明暗と唱歌の楽想は同行した。しかし、朝鮮は、江華島事件による突然の開国と近代化の荒波に文明開化を自主的に意識した際は、激動を物語る開化唱歌が現れ始めた。朝鮮の文明開化は北東アジア情勢からみると、日清戦争勃発の背景と同時展開の局面に置かれた。開化唱歌は名称だけ希望と歓喜をイメージし、実際の政局は日清戦争という惨禍、絶望、そして日本植民地への道が底流する重苦しい旋律が開化唱歌に織り込まれていた。民衆は単なる歌詞と旋律を物理的に発声し、本来の開化という明るい唱歌の姿は歌え切れないものであったと思われる。

おわりに

朝鮮の近代音楽教育史は日本の支配と抵抗の歴史として認識されている。興味深いことは、開国から日露戦争後の第二次日韓協約以前までを見ると、必ずしも緊張状態ではない新しい時代が存在し、さまざまな近代文明を享受した時期があるということである。日清戦争の結果は、日本が戦勝国ではあったが、三国干渉などにより朝鮮支配はできず、束の間とはいえ、ある程度の安定した開化期が到来していた。

本稿は、この開化期に歌われた唱歌を愛国唱歌教育運動の愛国唱歌に含めながら、あえて開化唱歌と位置づけた。愛国唱歌といえば、抗日運動に歌われる唱歌と認識されるが、開化期だけは、

希望、歓喜に溢れる開化唱歌が歌われたことを新しい視点から考察してみた。

また、先行研究においても、開化期には必ず明るい開化唱歌を取り上げたが、その位置づけが明確に示されなかったため、開化唱歌に傾倒されて音楽教育の固有性が希薄となり、結果として音楽学研究に近づく現象を露呈した。

したがって、本稿では、その事前研究として本来の音楽教育史研究を目指して韓国近代史、韓国近代教育史、そして韓国近代音楽教育史の構成を試みた。ちなみに、今回の研究は、研究範囲を日清戦争前後の民族学校を対象にしたが、今後は同時期の官公立学校とキリスト教主義学校の開化唱歌を相互関連させて、新たな韓国近代音楽教育史を探ってみたい。

注

- 1) 本稿は、1876年江華島条約による朝鮮の開国から日清戦争前後を主な対象にしているが、一部は論述展開のために日露戦争後も視野に入れている。したがって、本稿は国号を朝鮮とする。
- 2) 開化論をテーマとする研究は、李光麟『韓国開化史研究』一潮閣、1992年。李海明『開化期教育改革研究』乙酉文化社、1991年。孫仁銖『韓国開化教育研究』一志社、1985年。柳永烈『開化期の尹致昊研究』ハンギル社、1985年などがある。
- 3) 徐載弼（1866～1951年）は、独立運動家、13歳に科挙試験に合格した後、開化派の金玉金、徐光範などと交友した。1884年に日本の陸軍幼年士官学校を卒業した。帰国後、国王に士官学校設立を進言し、初代士官長となる。金玉均が甲申政変を起こすと、米国へ亡命し、後に米国に帰化する。1888年ワシントン大学医学部を卒業し、1896年に帰国すると、『独立新聞』を発行すると同時に、李商在、李承晩、尹致昊などと独立協会を結成した。
- 4) 『独立新聞』1896年5月30日。
- 5) 『独立新聞』1896年8月4日。
- 6) 『独立新聞』1897年8月19日。
- 7) 李舜臣（1545～1611年）は朝鮮の武臣、1579年科挙試験の武科に合格し、南西部の全羅道左水營に任じた。1592年に豊臣秀吉が朝鮮を侵攻した際、慶尚南道の泗川海戦では、自身が開発した独特な戦艦「亀船」で戦い、秀吉軍を撃破するなど、多大な戦果を挙げ、韓国の民族英雄として讃えられている。
- 8) 林慶業（1594～1646年）、朝鮮の武臣、1618年科挙試験の武科に合格、同年に李适の乱が起きると、陸軍に志願して鞍峴戦闘で勝利し、一等勲章を受ける。1636年丙子胡乱（モンゴル軍侵略）の際、内部陰謀で追い詰められると、清軍に捕虜となる。その後、清軍への帰服強要を最後まで拒むと、清国も彼の忠を高く評価し、帰国させたという。
- 9) 『独立新聞』1898年1月18日。
- 10) 『独立新聞』1898年1月18日、1897年3月27日。
- 11) イザベラ・バード、時岡慶子訳『朝鮮紀行』講談社、1998年、489～490頁。

- 12) 『独立新聞』1896年9月12日。
- 13) 『独立新聞』1897年3月27日。
- 14) 『独立新聞』1898年1月20日。
- 15) 『独立新聞』1898年3月17日。
- 16) 世界教育史研究会『世界教育史大系5 朝鮮教育史』講談社、1997年、220～221頁。
- 17) 『朝鮮紀行』474頁。
- 18) 『独立新聞』1896年10月6日。
- 19) 『独立新聞』1898年3月5日。
- 20) 衛正斥邪とは、朝鮮後期に使われた用語であるが、朱子学儒教の思想を徹底することが正しい道であり、西洋思想による文明開化は人間や社会を破壊するものとして排斥しようとする思想である。
- 21) 『独立新聞』1898年3月24日。
- 22) 同上書。
- 23) 『教育時論』第335号、1894年8月5日。
- 24) 『太陽』第1巻第7号、1895年7月5日、7～16頁。
- 25) 同上書15頁。
- 26) 『教育時論』第335号、1894年8月5日。
- 27) 『教育時論』第343号、1894年10月25日。
- 28) 『教育報知』1894年8月25日。『教育報知』1894年9月8日。
- 29) 『教育時論』第343号、1894年9月2日。
- 30) 『教育時論』第343号、1894年12月25日。
- 31) 『太陽』1895年4月。尹健次『朝鮮近代教育の思想と運動』東京大学出版会、1982年、209頁。
- 32) 『教育時論』第359号、1895年4月5日。
- 33) 『教育時論』第360号、1895年4月15日。
- 34) 『教育公報』第268号、1903年2月15日。
- 35) 『教育時論』第350号、1895年1月5日。
- 36) 同上書。
- 37) 魯棟銀『韓国近代音楽史1』ハンギル社、1995年。
- 38) 『独立新聞』は、1896年4月7日に発行された韓国最初のハンゲル新聞である。徐載弼を中心に発行したが、独立協会の機関紙の役割を果たした。第4面には英文版『The Independent』という題号の下に論説および国内政治の動向、生活風習などの韓国紹介記事で埋めた。この新聞は厳正中立を堅持し、自由、民権の確立および民衆啓蒙を目標と掲げた。しかし、保守勢力である親露派に対する批判、暴露を繰り返し、徐載弼は脅迫、威嚇に直面されると、1898年米国公使シール(J.M.B.Sill)の勸告を受け、再び渡米した。その後は、宣教師アッペンゼラー

(H.G.Appenzeller) が英文のみで発行したが、4年後に廃刊された。

39) 『独立新聞』1896年5月19日。

40) 『独立新聞』1896年5月26日。

41) 『独立新聞』1896年5月9日。

42) 李商在(1850~1929)は宗教家、政治家であり、キリスト教による民族精神を高揚に努めた。彼は独立協会の組織メンバーであり、民衆啓蒙運動に尽力し、1962年大韓民国建国功労勲章が授与された。李承晩(1875~1965年)は独立運動家、開化思想に惹かれ、キリスト教に帰依した。独立協会の幹部として開化運動に投身した。1904年に渡米し、日本の韓国支配を訴えた。その後、ワシントン大学、ハーバード大学、プリンストン大学を卒業した。日本植民地から韓国解放後に帰国し、1948年韓国の初代大統領となった。そして尹致昊(1865~1945年)は政治家であり、開化運動に投身した。彼は17歳に紳士遊覧団に加えられ、日本や米国を訪問し、後に米国に留学した。帰国後、1889年甲申政変に協力したが、失敗して米国へ亡命した。1895年に帰国し、学部協弁(次官)となり、徐載弼などと独立協会を組織した。しかし、日本植民地時代には親日派となり、解放後、親日派として批判され、自殺した。

43) 独立協会(1896~1898年)は、政府の外国依存に反対する開化派の知識層が韓国の自主独立と内政改革を標榜しながら、啓蒙活動を指導した団体である。同会には、徐載弼を中心に李商在、李承晩、尹致昊などが積極的に参与し、初期には討論会、弁論会、演説会などで民衆啓蒙運動を展開し、多くの青年から支持を受けた。まもなく政治問題にも関心をみせ、民主主義、民権思想の普及に努めた。特に1898年より万民共同会を開催し、政府改革案6条を取り上げ、皇帝に施政を要望した。後に、同会は政府を猛烈に批判しながら、共和制国家の樹立を提示し、重要人物が警察に逮捕されるなど対立を極めた。このような時局事態は、1899年に解散を余儀なくした。

44) 『独立新聞』1896年7月16日。

45) 同上書。

46) 『皇城新聞』1898年9月20日。

47) 『独立新聞』1896年9月22日。

48) 『帝国新聞』1902年10月25日。

49) 『皇城新聞』1904年5月13日。

50) エッケルト(Eckert, Franz 1852~1916年)はドイツの軍楽指揮者、作曲家であり、彼はブレスラウおよびドレスデン音楽学校を卒業し、海軍軍楽隊長となり、1879年海軍軍楽隊教師として来日した。1900年まで海軍軍楽隊、音楽取調係、宮内省雅楽課、陸軍軍楽隊の教師、文部省小学唱歌編集顧問として、日本の音楽教育に尽力した。帰国後、プロイセン王室楽長の称号を授けられた。1910年には朝鮮王室の楽長として来朝した。同行した娘は、徳語学校(ドイツ語学校)のドイツ人教師と結婚するなど、朝鮮に永住した外国人教師である。晩年は日本植民

地統治下の朝鮮京城（ソウル）で極貧生活を送り、その後、家族もこよなく愛した韓国の国立外国人墓地に埋葬されている。なお、エッケルトの韓国時代の写真は中村理平『洋楽導入者の軌跡－日本近代洋楽史序説－』刀水書房、1993年を参考にされたい。

- 51) 『独立新聞』1897年8月17日。
- 52) 『皇城新聞』1907年7月16日。
- 53) 「教育学原理」(前続)柳瑾訳述『大韓自強会月報』第7号、1907年1月。